眠れる恐怖《トラウマ》

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
眠れる恐怖（トラウマ）

【Ｎコード】
Ｎ９９０７Ｅ

【作者名】
冥界寺吹雪

【あらすじ】
ちょっと特殊な文章です。こういうのをやってみたかったので書いてみました。私の過去に書いた小説である〇ラクト・ガール〇幽雅に咲かせ、冥々の西行妖〇永遠の報い～Ｉｍｐｅｒｉｓｈａｂｌｅｌｉｆｅの三作品を読んだ上で見ていただけるとうれしいです。

（前書き）

地霊殿のネタバレになるかもしれません。ご注意を

深い大地の底。人間が入り込んでいるという事実は深さを増すごとに広がっていった。

人間が地中を訪れることはまさに前代未聞。地中に封印された者達は久しぶりの人間に自らの力を試したくなるのも無理はない。

しかし、その人間は強すぎた。当たり前だ。これだけ深く、地中を下ろうとしているのだから。

大地の
「核」にさえ迫り、上層部に比べ比較的温暖な場所、地霊殿。地底の者でさえ忌み嫌うこの地に、あの鬼は人間を差し向けたらしい。

「さぁ、出てこい！悪党妖怪め！」

威勢のいい声が地下ではよく響く。私は、小さく呟く。

「ようこそ、地霊殿へ。あなたの噂は聞いているわ」

「私も有名になったものだな」

温泉でまったりと温まりたい。そんな理由でこの地を訪れるとは、ここまで来れる大物の考えね。

「ここにきても温泉は沸かないわよ？」

「あ？何故私の考えていることが・・・」

やはり。地上の人間は私のことなど知らないか。なら、少しは思い知らせてやるのも面白い。

「気持ち悪い奴だ、ですか。正しい感情ですね」

この人間は面白い。何も考えていないように振る舞っているが、頭の中では次に何を言おうか、どう動こうか、しきりに考えをめぐらせている。

「で、地上に溢れる悪霊を止めろ、とわざわざこんなところに来たのね？」

「あ、ああそうだ。話が分かってるならとっととやってくれ」

「おあいにくさま、その原因は私ではありません。おそらく・・・ペットの管轄ですね」

「ペットだぁ？お前は何者なんだよ？」

最初から抱いていた疑問を今頃言いだすなんて、人間はよく分からない。

「私はこの地霊殿の主。・・・とりあえず、勝手に私の家に上がり込んできたんだから少しは覚悟してもらいます」

「覚悟？はっ。それはこっちの台詞だ。覚悟しやがれ！」

「私の弱点を悟るまで大きく動くつもりもないのに口先だけは達者ですね。・・・いいでしょう、あなたに見せてあげるわ」

私は、小さな本を開く。

「・・・眠れる恐怖に怯えるがいい！」

・
・・
・・・

「パーチュリー！」

やってきた。

「・・・・今日は何の用なの？」

「今日は何としても図書館で借りたい本があるんだ。ということで開けてくれ」

「・・・・帰って」

静かにそう呟いた。

「あ・・・・ほら、あれだよ。魔導書が大量に置いてあるんだってな。そのうち一つでもいいんだ。・・・・何なら、私はここで待ってるからパチュリーが持ってくるんでもいいぜ？」

「・・・・帰って」

答えは変わらなかった。しばらくパチュリーの反応を待っていたが、パチュリーがこれ以上何もいわないことを悟って

「・・・・分かった、また来るぜ」

そう言うと、扉の前から立ち去ろうとする。その時だった。

「もう来ないで」

呟くような、小さな声。

「な・・・・、私が何かしたか？」

「いいからもう来ないで！！」

パチュリー本人でさえ聞いたことのない程に声をあらげていた。驚いているのだろうか、扉の外側からは何も聞こえてこない。

「もう私には、かまわないでよ・・・・」

かすれた声が静かに図書館に響く。扉の外からの声は無く、ただゆっくりと遠ざかる足音だけが物寂しげに聞こえてくるのだった。

・・・・
・・・
・

いつの間にか雨が降っていたようだ。シトシトと、冷たい音が響く。

「・・・ふん。なんだ、その話は」

震えようとしている体を必死におさえているのがよくわかる。素直な人間だ。

「あなたに眠るトラウマ。根をはり完全に取り除かれることのない断片的なあなたの記憶でしょう？」

「違う！私は何も知らない！知っているはずがない！」

人間が何を言っても無駄なこと位わかっているだろうに。もう少し、分からせる必要があるようだ。

「認めたくないならそれでいいです。更なる恐怖を味わうだけですから」

・
・・
・・・

「死蝶はやがて地に積もり、新たな地を作り上げる。それは生命が死に、土に変わることとなんら変わりのないこと」

いつしか幽々子は縁側に座り、瞳を閉じていた。

「・・・春を置いてゆきなさい。あなたたちが土に還る時は、まだ先のはずよ？」

少女達が引き返すとは思っていない。引き返すくらいなら、初めから訪れることもないだろう。

「私のスパークを受けないつもりか？そいつは無茶な話だぜ」

「寒いままだとお嬢様が安眠出来ませんの。帰る訳にはいきませんわ」

「そういうことよ。大人しく桜の下に堕ちることね」

力もない癖に、強がりだけは一人前。・・・昔の私も、ああだったのかしら。

幽々子は両手にもつ扇を空高く掲げ、そして呟いた。

「蝶符・・・」

扇に纏う光が、さらに強さを増してゆく。その妖しき光、まさに死霊の如し。

「鳳凰紋の死槍」

その槍は舞い踊る死蝶を焦がし、張られた結界を無惨に破り。

そして、全てを貫いた。

ほとけには
　桜の花を
　　たてまつれ
　我が後の世を
　　人とぶらはば

・・・

・・・

「・・・」

「言葉を失うどころか、思考すら止まってしまって。・・・そう、この人には始めから興味なんてありません」

「私が恐怖を見せているのは・・・もう、お気づきでしょう？」

「なら、もうわかっているはず。私が見せる、最後のトラウマをね」

「さぁ、これでおしまいです。眠れる恐怖に怯えるがいい！」

・
・・
・・・

「こんな夜道に人間さんが、この竹林になんの用だい？」

追い払わなければ。人間を殺すのは、好きじゃない。

「あら、これが肝試しの最終関門かしら？」

「なーんだ、ただの人間じゃねーか」

肝試し。人間が己の肝を試す為に自ら恐怖へ飛び込む、あの肝試しか？草木も眠る丑三つ時、妖怪の跋扈するこの時間に、人間だけで肝試しとは・・・

「ああ、何て愚かな人間かお前達は。今すぐ家に帰った方がいい。肝どころか、何もかも持ってかれてしまう前に」

「ほ、ほらぁ。ああ言ってますし、早く帰りましょうよぉ

「あんたは黙ってる」

巫女衣装の少女は続ける。

「まぁ、これが肝試しの肝ならちょうどいいわ。人間相手は好きじゃないけど・・・」

巫女はお札を自らの周囲を囲むように展開させ、そのまま私目掛けて突っ込んでくる。

「一発で終わらせるわ。喰らいなさい！」

展開されたお札は次々と放たれ、その全てが私に向かってくる。

私はそれらを同じくお札を展開させ、相殺させる。

「な・・・札の質がっ！」

巫女の札を掻き消した私の札は勢いを止めず、さらに拡散する。

「きゃあ！！」

その何枚かが巫女に直撃。その身体が強引に地面にたたき付けられ、思わず悲鳴をあげる。

「お、おい！大丈夫かよ？」

慌てて後ろの三人が巫女に駆け寄る。

・・・やはり、人間は脆い。脆いからこそ、痛い目を見てもらってでもこの場所から立ち去ってもらわなければならない。

それが彼女達の為だから。

「全く、何をやっているのよ」

・・・この声。
聞いた記憶がある。いや、忘れるもんか。
この声は・・・

「あら、お久しぶりね」

「・・・現れるの、待ってたよ」

心臓がはち切れるかのように鼓動しておさまらない。この感覚は、なんだろう。

「待ってた？ご冗談を」

千年の時を経て、

「恐怖に怯えたあの顔、今でも忘れないわ」

やっと、

「私を不老不死にした罪、償って貰うよ」

・・・
・・
・

「トラウマは、更に増え続ける。この体験すら、あなたのトラウマになります。このトラウマが元に、更に新たなるトラウマが生まれるでしょう。こうしてトラウマは連鎖を続け、それが尋常でない恐怖を生むのです」

「ここに訪れた全ての人間よ。二度とここを訪れないことです。そ

こで恐怖に怯え、思考すら止まってしまった人間のようになりたくないのなら・・・」

「それでも来ると言うのなら・・・いいですよ。次に来た時には最高のごちそうを用意して待っています」

「眠れる恐怖という、最高のごちそうを」

（後書き）

好きです、さとり。あらすじに書いた三作品を読んでいなくてここまで来てしまった方はすいませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9907e/

眠れる恐怖《トラウマ》

2010年10月10日09時56分発行